●ワンポイントレッスン●

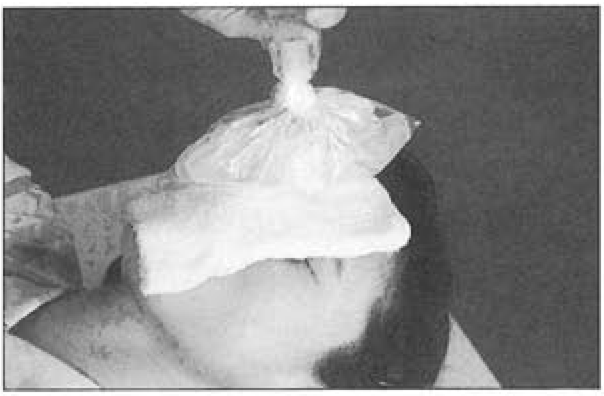
眼圧亢進症と生理的冷却

眼圧亢進症は一般的に、いろいろな複雑な病気を誘発することが知られています。中には緑内障性に失明する場合もありますし、脳圧亢進に伴う症候としての眼圧亢進症が出現する場合もあります。臨床的に実際に調べてみると、眼圧亢進側は、等光源反応として瞳孔の健側に対する収縮失調がみられる傾向があり、あるいは同一視野では、視野そのものが比較的暗く見えるいわゆる暗視野像がよく起こります。これに対する基本的な構造医学的対応は確立されていますが、簡単な対応としては生理的冷却療法があります。

ここで注意しなくてはいけないのは、眼球そのものの冷却は強膜（眼瞼結膜）が直接露出しているために、冷却効果が眼球および眼房水に非常に強く働く傾向があり、眼球に対する過冷却現象がときどきみられることです。これを防ぐには、タオルを四つ折りぐらいにし、これを濡らしてよく絞ってから眼球に当て、この上から冷却することです。生理的冷却法ですから、氷はもちろん冷蔵庫から出したばかりのポテンシャルエネルギーの高いものではなく、一度水洗いしてビニール袋に入れたものを使います。冷却時間は、20分までで、それ以上冷却しますとかえって悪い影響が出てきますので、よく注意する必要があります。

日本構造医学研究所では近在の眼科医および附属診療所とともに経過をみていますが、眼房水圧つまり眼圧で27～30レベルという非常に高い緑内障性のものであっても、４か月ほどの冷却で、眼圧が17レベルまで下がってくる例が、全体の８割を超えています。ただし、過冷却に陥らないようにすることが非常に大切です。眼圧亢進の理由については、機会を改めてまた、触れたいと思います。

（日本構造医学研究所）



眼圧亢進症に対しては、タオルを濡らしてよく絞ってから眼球に当て、この上から氷で冷却する。時間は20分が限度。